

Title	Scheduled endoscopic surveillance controls secondary cancer after curative endoscopic resection for early gastric cancer : a multicentre retrospective cohort study by Osaka University ESD study group
Author(s)	加藤, 元彦
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59695
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

〔目的(Purpose)〕

粘膜内および粘膜下層浅層にとどまる早期胃癌はリンパ節転移の危険が極めて低く、局所の切除で根治が期待できる。内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)では、大型の病変や潰瘍を合併するなど従来は内視鏡的な切除が困難な早期胃癌症例に対しても病変を確実に切除することで胃を温存することができ、本邦において広く普及している。一方、多くの胃癌は慢性胃炎を背景に発生することから、同時性・異時性に多発することが知られている。ESDでは胃が温存されることで残存する胃粘膜からの発癌が高頻度で起こりうるため、術後のサーベイランスが重要である。適切なサーベイランス法を明らかにする目的で、多施設での検討を行った。

〔方法(Methods)〕

1999年10月～2010年12月に大阪大学関連12施設でESDを施行された早期胃癌1285例を対象に以下の検討を行った。

- 1) 1年以内に多発癌が発見された同時性多発癌のうち、初回ESDまでに病変が発見されていなかった症例を見落とし例と定義して、同時性多発癌病変に占める見落とし病変の割合を検討した。
- 2) ESD後1年以後に発見された異時性多発癌の累積発生率をKaplan-Meier法で検討した。
- 3) 発見された多発癌の病理学的特徴を検討し、発見時に粘膜下層深部に浸潤していた癌の発見時期を検討した。

〔成績(Results)〕

- 1) 1年以内に発見された多発癌110例中、見落とし例は21例、19%であった。
- 2) 多発癌の発生率は年率約3%でほぼ一定であった。
- 3) 発見時に粘膜下層深部に浸潤していた多発癌を5例にみとめた。このうち4例はESD後1年以内に発見されていたが、全例が術前の検査で見落とされていた。一方、1年以降に深部浸潤癌で発見された多発癌は1例(1/852=0.12%)のみであった。

〔総括(Conclusion)〕

ESD後1年以内は見落とされている同時併存の深部浸潤癌の発見のため、密なサーベイランスが必要である。一方、1年以後は多発癌の発生頻度が一定で深部浸潤癌の頻度はきわめて低率であることから、年1回程度のサーベイランスでよいと考えられる。

論文審査の結果の要旨

ESD後の適切なサーベイランス法を明らかにする目的で行われた、多施設後向きコホート研究。ESDを施行された早期胃癌1285例を対象に見落とし率(1年以内に多発癌が発見された多発癌のうち、初回ESDまでに病変が発見されていなかった割合)、ESD後1年以後に発見された異時性多発癌の累積発生率、多発癌の病理学的特徴を検討した。見落とし例は19%であり、多発癌の発生率は年率約3%でほぼ一定であった。発見時に粘膜下層深部に浸潤していた多発癌を5例にみとめた。このうち4例はESD後1年以内に発見されていたが、全例が術前の検査で見落とされていた。一方、1年以降に深部浸潤癌で発見された多発癌は1例のみであった。以上の結果からESD後1年以内は見落とされている同時併存の深部浸潤癌の発見のため、密なサーベイランスが必要であるが1年以後は、年1回程度のサーベイランスでよいとの結論が導かれた。

本研究はESD後の多発胃癌の発生を明らかにした重要な研究であると考えられ、学位に値するものと認める。

【78】

氏名 加藤元彦

博士の専攻分野の名称 博士(医学)

学位記番号 第25904号

学位授与年月日 平成25年3月25日

学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当

医学系研究科内科系臨床医学専攻

学位論文名 Scheduled endoscopic surveillance controls secondary cancer after curative endoscopic resection for early gastric cancer: a multicentre retrospective cohort study by Osaka University ESD study group

(定期的な内視鏡サーベイランスにより早期胃癌に対する内視鏡的切除後の多発癌を早期に発見できる。大阪大学 ESD Study Group による多施設後向きコホート研究)

論文審査委員 (主査)
教授 竹原 徹郎

(副査)
教授 土岐 祐一郎 教授 森井 英一